

とになったのである。そこにこそ証誠護念の意味があるであろう。

しかれば諸仏の名に於て、同学同信の人々を思い合やすこともよいことである。されどそれが恆沙塵数と説かれてあるから、その名を知ると知らざるとに關りのないことであろう。人心の奥底に徹すれば、一切の衆生は、そのままに、証誠護念の諸仏であることを感知することができるのである。

念 仏 往 生

念仏往生といえは念仏と往生と二つのことに思いますがそうではありません。念仏は行、あるいは業であります。南無阿彌陀仏は是れ正行なり正業なりといつてありますから念仏は行に違いありません。その「行」というのは、歩みつつ行くということであります。一つの場所にいて手を動かすというようなことも、行ではありましようが、それだけでは行という意味は十分に現われていません。それはおこないであっても行ものではないからであります。されば念仏が行といわれるときには、このおこなうとゆくという両方の意味をもっておるものであらねばなりません。

したがって念仏するという中に往生という意味をもっておるのであります。即ち往生の往は念仏行の一面を現わしているのであります。これは行の具体的な相は、おこなうこと即ちゆくことであるということと知られましよう。しからば往生の生とは何ういうことであるか。生はうまれること、淨土というよき國へ生れることであります。

(金子大栄著『大源繁』より)